連載
第79回

マスコミのタブー100連発〈79〉
「生命」の謎が解けた！ それは波動エネルギーだ

地球環境評論家
船瀬 俊介

医者は詐欺師、ペテン師、殺人鬼……

先月号で、「乳房が再生した」奇跡を紹介した。乳ガン手術で全摘し、もはやあきらめていた乳房が、みごとに、みずみずしく、蘇生したのだ。

これはまさに世界の生物学界、医学界を震撼させるビッグニュースだ。

しかし、例によってマスメディアは、いっさい黙殺したままである。

なぜか？

全摘した乳房が新たに蘇るなどといったことは、「絶対にあってはいけない」ことなのだ。それを認めると、近代から現代にかけての生物学・医学の常識が根底から覆る。

すると、これら虚妄の教育（狂育）で人類を〝洗脳〟してきた〝闇の勢力〟は、おおいに困る。

船瀬 俊介（ふなせ しゅんすけ）
1950（昭和25）年、福岡県生まれ。九州大学理学部に進学するが翌年中退、1971（昭和46）年、早稲田大学第一文学部に入学。学生常務理事として生協経営に参加。約2年半の生協活動の後、日米学生会議の日本代表として渡米、ラルフ・ネーダー氏のグループや米消費者同盟などを歴訪。同学部社会学科卒業後は、日本消費者連盟に出版・編集スタッフとして参加。1986（昭和61）年に独立。消費者・環境問題を中心に評論、執筆、講演活動を行い現在に至る。1990（平成2）年にラルフ・ネーダー氏らの招待で渡米、多彩な市民・環境団体と交流を深めている。著書に『新・知ってはいけない!?』（徳間書店）、『悪魔の新・農薬「ネオニコチノイド」』（三五館）、『病院に行かず「治す」ガン療法』（花伝社）など多数。
http://funase.info/

まさに、不都合な真実……。そこでマスコミもいっさい、この生物学上の奇跡を取り上げない。

いや、取り上げることを許されない。

しかし、〝闇の支配者〟たちの支配力にも陰りが出てきた。その証拠が、昨今の週刊誌メディアによる果敢な医学批判だ。

『週刊現代』が連載で医療批判の口火を切ると、『週刊ポスト』も歯科医療告発で、それに続いた。これらの動きを「ねつ造だ」と揶揄していた『週刊文春』ですら、180度方向転換して、医療告発の記事を連載しはじめた。これら、現代医療の矛盾、危険、詐術は、私が20年来言い続けてきたことだ。

ようやく、マスコミ・世論が現代医療の根本矛盾にメスを入れ始めたのだ。その理由は、言うまでもない。一般国民、庶民、患者たちが、医療の根底にある詐偽、殺人の犯罪性に気づき、目覚め始めたのだ。

医療告発の先鞭をつけた近藤誠医師は「医者はヤクザ。ゴロツキより、たちが悪い」と断言している。まさに、〝かれら〟は、白衣を着た、詐欺師、ペテン師、殺人鬼なのである。ここまで罵倒されれば、医者も憤激して猛抗議してくるはずだ。ところが、いっさいの反論もない。

ガンの医者、1000人〝殺して〟一人前

むろん、彼らが患者を故意に殺そうと思って治療を行っている――というつもりはない。彼らは大学の医学部で習ったとおりに、さらに厚労省のガイドライン（指示書）の通りに日夜医療に奮闘し、大量の後遺症、死者の山を築いているにすぎない。

彼らは、自らがロックフェラー財閥などがねつ造した虚妄の医学理論（じつは殺人理論）に〝洗脳〟されてきたことすら、まったく気づいてない。

患者を助けようと、本気で思い、患者を本気で……死なせている……。

悲喜劇というには、あまりに哀しすぎる。惨すぎ

る。背筋の凍るカンちがいの結末だ。

彼らは、もう、うすうすと気づいている。

「こんな治療をしたら、死ぬかもな……」

そうして、その懸念どおりに、患者を次々に死なせている。

医者271人に「あなたは自分自身に抗ガン剤を打つか？」

と、訊いたアンケートがある。なんと、270人のドクターが〝ノー！〟だった。自分に打つという回答は、たった1人だったのだ。この医師たちに、あなたの病院に来たガン患者に抗ガン剤を打ちますか？　と訊いたら、おそらく全員が〝打つ〟と回答したであろう。

なぜなら、抗ガン剤は病院経営にとって、喉から手で出るほど儲かるのだ。たとえば、ペグイントロンという抗ガン剤は、1グラム3億3170万円だ。これは、なんと1円玉の重さ。ダイヤモンドより高い！　そんな、抗ガン剤がゴロゴロある。

こうして、病院はガン患者一人当たりで、約1000万円の利益を上げる。まさに、医者はガン患者が、1000万円の札束に見えるのだ。

ガン治療で〝殺された〟巨泉さんの最期

そうして、ガン治療でバタバタと患者は死んでいく……（殺されていく）。

最近、大橋巨泉さんがガン闘病の果てに亡くなった。満身創痍、抗ガン剤、クスリ漬け、の壮絶な最期だった。

じつは、カリフォルニア大学ハーディン・ジェームズ教授の徹底調査によれば、ガン治療を受けた人の平均余命は、わずか3年。ガン治療を受けなかった人は12年6か月と、4倍以上生きている！　なら、ガンになっても病院に行かない。これが正解だ。

さらに、菜食やファスティングなどの食事療法や温泉療法などで体を暖めるなど、自然な養生を行えば、ガンが消滅することも大いにありうる。

しかし、あの博識の巨泉さんですら、このジェームズ報告の存在すら、まったく知らなかった。

マスメディアも学界も、これら「不都合な真実」は闇に葬るからだ。

ほとんど時を同じくして親友の永六輔さんも世を去った。彼は長年、パーキンソン病に苦しんでいた。それは治療薬である向精神薬の副作用に苦しんできた……と同義である。さらに東京都知事選に果敢に立候補した正義漢、鳥越俊太郎氏も、選挙演説冒頭で「ガン検診100％実施を目指します！」と拳を振り上げるありさま。

彼は、日本の予防医学の権威、岡田正彦博士の著書『がん検診の大罪』（新潮社）や、拙著『ガン検診は受けてはいけない!?』（徳間書店）の存在すら知らない。

「ガン検診を受けた人ほどガンになり、ガンで死に、早死にする」のだ。

こんな事実すら知らない。自称ジャーナリストでありながら、まったくの勉強不足である。

そういえば肺ガンで亡くなった故・筑紫哲也さんが「ボクは、あまりにガンに対して無知だった……」と嘆きながら死んでいったことを思い出す。

一級の知識人と言われる人たちですら、このていたらく。ましてや、一般庶民の無知ぶりは、まさに目を覆うばかりだ。なにしろ情報源として1位にテレビを上げる人が94％……。フリーメイソン、イルミナティなど地球を影から支配する勢力に完全コントロールされている〝洗脳装置〟を、日本人の10人に9人以上が、心底、信じきっているのだ。人類家畜化を企てている〝かれら〟は、腹がよじれるくらいに大笑いしたくなるはずだ。

『新医学』二本の柱、「断食」と「波動」療法

なら、未来は暗黒に閉ざされているのか！

といえば、そうではない。

冒頭に触れたように、マスコミの一部で、公然と現代医療を批判、告発する声が上がり始めている。遅きに失したとはいえ、この巨大なうねりを、もう止めることはできないだろう。「だまされた！」と気づいた人は、もう二度と、だまされないからだ。

さて――。

私はちょうど『医療大崩壊』（花伝社）という著作を書き上げたばかりだ。

そこで、現代医療は完全崩壊している事実を、的確に記した。さらに、そこで真に人類の健康と生命を救う『新医学』を提唱している。

その中心に据えられる根本理論は、ファスティング（少食・断食）である。

ヨガの奥義にこうある。

――ファスティングは、万病を治す妙法である――

万病は〝体毒〟で生じる。その〝体毒〟を速やかに排毒するのが、断食である。

毒素が抜けきったクリーンな身体が健康になるのは、あたりまえすぎる話だ。

では、それ以外に医療が果たす役割はないのだろうか？

そうではない。断食に加えて、私が注目しているのが、この連載でお伝えしている「波動療法」なのだ。「波動療法」の歴史は、約100年も前にさかのぼる。「波動刺激が病気を治す」。それは、経験則的に、知られていた。

16人のガン患者、全員完治！ レイモンド・ライフ波動療法

その画期的な成功例が、ある。

16人の末期ガン患者に、波動療法を施したら、なんと16人全員のガンが消え、完治した！

治癒率100％……。施術したのはロイヤル・レイモンド・ライフ博士（写真A）。1888年米国生

まれ、1933年には3万1000倍の光学顕微鏡を開発した業績でも知られている。

「これほど医療において、革命的な発明・発見をした人物はいない」

これは、先進的なWebサイト『THINKER』の絶賛である。

「人々を苦しめる、あらゆる種類の病気を、完全に治療する方法を、約80年前に見つけた人物」（同）

しかし、世界の医療従事者ですら、彼の名前を知る人は、皆無と言ってよい。

（写真A）ロイヤル・レイモンド・ライフ博士。
出典：『THINKER』

なぜか……。

「医療の正史には、決して出てこない、抹殺された天才の壮絶な人生が物語っています」（同）

16人の末期ガン患者、完全治癒。素晴らしい成果と絶賛するしかない。しかし、ガン利権を独占する国際ガン・マフィアの対応はちがった。このめざましいガン治療の成功事例を徹底的に弾圧し、闇に葬ったのである。先号で紹介した「AWG」療法で数千人を治癒させた松浦優之（まつうらゆうじ）博士も警察に逮捕され有罪判決を受けている。

ロックフェラー医療独占体制下の世界では「病気を治す」と弾圧され、「病人を殺す」と称賛されるのである。

こうして、「波動療法」も、そのめざましい治療効果ゆえに全世界で医療マフィアの陰謀で徹底的に弾圧され続けて、今日にいたる。

しかし、真に治療効果のある医療を、完全に葬り去ることは、不可能である。

その一例が、「ＡＷＧ」波動療法だろう。先月号で紹介した「乳房が再生した！」というニュースは、衝撃とともにクチコミで広がっている。

あなたも、ネットなどで先月号の記事をアップして、世に広く広く伝えてほしい。著作権など、いっさい気にする必要はない。

先月号の「ＡＷＧ」療法の他、８月号では、ロバート・ベッカー博士が提唱した「電気療法」も紹介した。やはり、根本理論は同じだ。

「人体の各組織、臓器、器官は、独自の周波数を有しており、受精卵という万能細胞が、各々の異なった臓器に変貌していくのは、神経系による固有周波数の刺激による」

同じことは、傷の治癒にもいえる。

傷口の体細胞は、神経ネットワークからの一次治癒電流で万能細胞にもどる。次に二次治癒電流で、個々の万能細胞に固有周波数の指示電流が流れ、皮ふ、筋肉、骨、血管、神経などの体細胞に変化するのだ。

じつに、シンプルで明解な理論だ。しかし、現代医学の研究者たちは、こんな単純なことすら、まったく知らないし、理解できないのだ。

つまり、現代医学は「傷がなぜ治るのか？」すら〝まったく解らない！〟

それほど稚拙で、愚かで、低レベルなのだ。

そんな、医者に命を預けているのがあなたであり、あなたの家族なのだ。病気が治るわけがない。

各臓器の固有周波数のズレを改善または診断

先月号でも述べたが、この固有周波数理論は、治療とともに検診でも使える。

「波動療法」の根本理論は、個々の臓器の正しい固有振動数の電気や磁気、音波などの波動刺激を与えることで、周波数の歪みを是正し、臓器の働きを正常にする。

逆に「波動診断」は、各臓器が固有振動数から、どれだけズレているかを測定する。

固有周波数からズレている臓器ほど、不自然である。つまり、弱っている。病んでいる。その周波数のズレから、個々の臓器の健康状態を測定することができる。

「ＡＷＧ」測定装置は、１分の測定で約２００項目もの診断結果を瞬時に弾き出すのには、驚いた。それは、まさにコンピュータによる高速処理によって初めて可能になった最新技術なのだ。

むろん、どんな周波数でも闇雲に当てればよい、というものではない。

「ＡＷＧ」研究者たちも、１～１万ヘルツの低周波を徹底的に解析して、69種類の波長が、各臓器に共鳴を起こし、有効であることを実証したのだ。

その他――。

同様の「波動療法」を紹介しよう。

「テラヘルツ療法」：一秒間に兆単位のミクロ振動で治す

テラヘルツとは、１秒間に１テラ回（兆回）以上振動する波のことである。（図Ｂ）

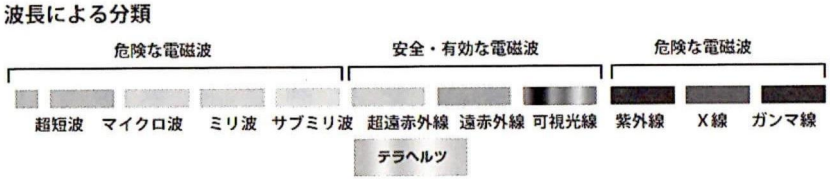
波長で分類すると「超赤外線」「遠赤外線」「可視光線」が、それに相当する。（図Ｃ）

このテラヘルツ波の振動を病気やケガの患部に当てると、目覚ましい治癒効果が上がることが確認されている。すでに医療現場でも、テラヘルツ療法は導入されている。（写真Ｄ）

それは、遠赤外線や可視光線などと違い、身体の深部まで到達することが特徴である。そこで病気の原因となった細胞や組織を活性化し、治癒効果を上げると考えられている。具体的には「元気な時の細胞に再生・修復する働きがある」「老化して衰退した細胞を、活性化させる」。

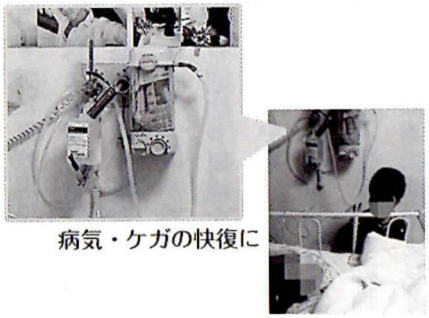
さらに「活性酸素（フリーラジカル）や不要代謝

(図B)1秒に1テラ回(兆回)以上振動する波。



(図C)「赤外線」「遠赤外線」「可視光線」相当。

疲労や、肩こりなど患部に直接あてる。



病気・ケガの快復に

(写真D)テラヘルツ療法は、導入されている。

出典:HP.テラヘルツヒーラー&テラヘルツシャワーより

産物(体毒)を除去する」といわれている。活性酸素が万病の原因であることは、もはや常識だ。

ただしテラヘルツ波が、どのようなメカニズムで、ガンなどの難病治療に効果を上げるのかは、完全に解明されているわけではない。

しかし、経験則でめざましい治療効果を上げていることも事実だ。このテラヘルツ療法は、「AWG」療法と相通じるように思える。

なるほど、テラヘルツは、低周波より、はるかに振動数は多い。しかし、身体には生体チューニング機能が備わっている。(ロバート・ベッカー博士)

これは、ラジオのAM電波とFM電波を比較すると、わかりやすい。

AMは音波の波形で電波を送る。FMは遥かに周波数が多いが、その振幅の波形は、アナログAM電波と同じだ。だからFMラジオも、原音を再生することができるのだ。これをチューニングという。

よくラジオでチューナーという、あの装置が、それである。

だからテラヘルツ療法は「AWG」療法と同じく、固有臓器の周波数を修復・調整していると考えられる。

「音響免疫療法」:〝羊水の響き〟ミクロ・マッサージ効果で治癒・若返り

これは、日本が世界に誇る発明家、西堀貞夫博士の発明の一つである。

博士は、東大医学部を経て、ハーバード大医学部を卒業という天才的頭脳の持ち主。この「音響免疫療法」は、アメリカ政府、中国政府等の協力を得て、開発されたものだ。西堀博士が着目したのは、母親の羊水で育つ胎児であった。

その羊水の響き(周波数)に、生命の根源的な力を見出だしたのである。

「……胎児は体内の羊水の脊髄の響きで育ちます。羊水の中で『胚子の魚』『両性類』『爬虫類』『原始

哺乳類』……赤ちゃんの誕生まで、35億年の生物進化で胎児となります。魚類の時代は、脊髄の感覚器官で聴いていました。胎児が脊髄の響きで興奮するのは、このためです。母親は36度台の低体温。母親が伝える羊水の波動エネルギーは『胎児を38℃に温め』『尿で汚れた羊水を浄化』『水分80％の細胞』を育てます」（西堀博士）。

（写真E）羊水の中で胎児が発する「胎光」。

「音響免疫療法」は、この〝羊水の響き〟を再現したものです。

「身体を温める脊髄の響きは、自己免疫力を高めます。〝羊水の響き〟は、西洋医学を超えた自然療法です」（同）

博士は、羊水の中に出現する〝胎光〟という不可思議で神秘的な現象に着目している。（写真E）

それは、まさに、生命の「魂の光」。もっとも理想的な生命波動が生み出す〝光〟なのだ。

脊髄の急所で聴く「映像ホームシアター」

博士は、生命の体内波動を、この胎児の理想的波動に近づければ、病気や老化も防げる、と主張している。

「……50才の細胞の水分は50％に減少して、しみ、シワが多く、老化した体質になります。〝羊水の響き〟は、身体を38℃に温め、70兆個の体内細胞を赤ちゃん細胞（水分80％）に近づけ、若返らせます。白血球、赤血球、リンパ球、脳細胞、骨芽細胞も新しくなります。糖尿病、高血圧でドロドロに汚れた血液を、〝羊水の響き〟のマッサージは、即効的に温め、水分子を変え、サラサラにし、血液をよくします」（同）

それは、まさに音波振動によるミクロのマッサージ効果だ。

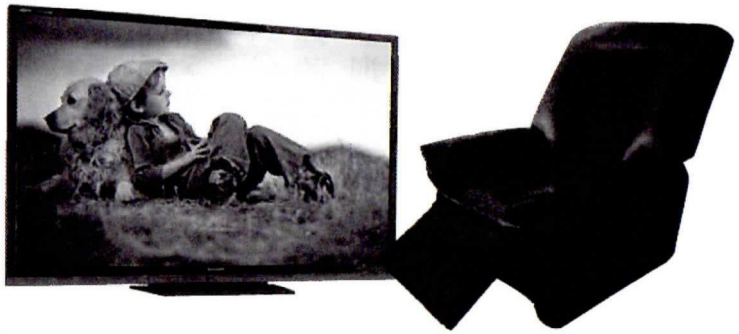
「血管内皮を震わせ、毛細血管を若返らせます。この毛細血管の活性化は『臓器』『目』の機能を高めます」さらに「脳血液、脳細胞を温める響きは、脳への血流を高め、うつ病、アルツハイマーを吹き飛ばす」と博士は強調する。

博士は、この「音響免疫療法」を治療器具ではなく、娯楽器具として、提案していることが面白い。

それは――「急所脊髄で、映画・テレビ・音楽を見る『映像音響システム』――つまり『映像ホームシアター』として販売している」ことが実にユニーク。（写真F）

その特徴は、ズバリ「脊髄の急所で聴く」。目の前には大画面液晶パネル。私もこの椅子に座って体験（体感）してみた。この「映像再生装置」と椅子の「波動発生装置」はリンクしている。音響源・映像源は、なんと市販DVDである。

ゆったりとソファに腰を降ろして、DVDがスタート。映像とともに歌手の歌声が、脊髄に直接響く。まさに、耳ではなく、脊髄で聴いている……！



（写真F）映像ホームシアターとして販売している。

これは、これまでのオーディオでは、まったく体験したことのない「音響体験」であった。なるほど、脊髄で音を聴く……という言葉が納得できる。

つまり、一見、DVD映像と音響で大迫力のエンターティメントに見えながら、実に、脊髄の中枢を振動マッサージする医療機器なのだ。

博士がこれを「映像ホームシアター」として販売しているのは、医療効果をうたうと薬事法違反となり、さらに難しい手続き……つまり、妨害……が待っているので、表向きは、娯楽機器と割り切って販売しているのだ。

しかし、現代医学に絶望した中国政府から、数百台単位で注文が殺到している……という。一台300万円と、けっして安くはない。しかし中国やアメリカの富裕層からの引き合いが絶えない、という。

その大迫力の音響体感から、従来のオーディオ・愛好家からも注文が殺到しそうだ。熱中マニアは音響機器に数百万単位のカネを投じるのも珍しくない。

そんな愛好家にとっても、〝身体で聴く〟オーディオ装置は、垂涎（すいぜん）ではないだろうか。

■お問合せ：〒141-0033
東京都品川区西五反田2-31-4 KKビル
音響免疫療法患者の会／国際音響免疫療法学会
TEL：03-5487-0555
FAX：03-5487-0505

森下敬一「経絡造血」理論：「氣」（宇宙エネルギー）が血となる

やはり、羊水の中で胎児が発する「胎光」に着目した研究者がいる。

それが、千島・森下学説で高名な森下敬一（もりしたけいいち）博士である。（写真G）

それは、胎児の自然な生命エネルギーの波動が、光（可視光線）の波長で出現したものだ。

「……胎児は、母親の体の中で食事をしているわ

けではない。したがって、腸管造血ではない」「〝氣〟という宇宙エネルギーを活用して、経絡の中でソマチッド（生命最小単位）が誕生し、発育していく」（森下博士）

これは、目に見えない四次元的な宇宙エネルギーが、経絡の中で、ソマチッドという微小生命体を増殖させ、それが血球に変化し、さらに体細胞に変化していく。まさに、従来の科学を根底から覆す壮大な理論である。

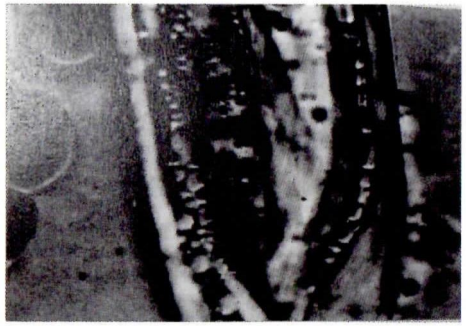
森下博士は、この「経絡造血」を仮説として提唱

（写真G）森下敬一博士

しているのではない。

すでに、経絡で〝氣〟エネルギーを吸収して、ソマチッドが増殖していく様子を、観察、証明している。（写真H）

さらに圧倒されるのは、森下博士の「チューブリン微小管」理論だ。チューブリンとは〝球たんぱく〟の意。博士は断言する。「宇宙エネルギーは、正面か



「ボンパ血管」は、経絡管からリンパ管への移行型と考えられ、ソマチッドからリンパ球への成育過程も見られる。

（写真H）“氣”エネルギーを吸収、ソマチッドが増殖。

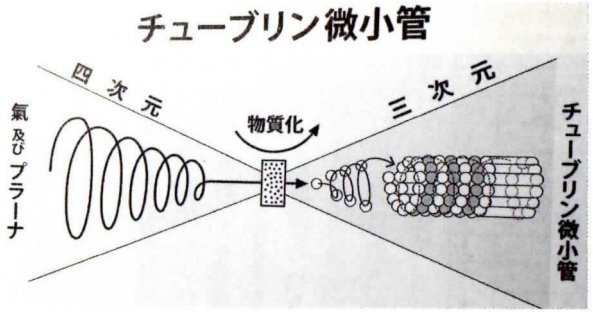
ら見れば回転運動です。横から見れば、それは波動運動です」。

つまり〝氣〟エネルギーはらせん運動をしている。四次元の〝氣〟エネルギーのらせん運動は三次元の生体で物質化する（図Ⅰ）。そのとき〝宇宙エネルギー〟の、らせん運動にしたがって、三次元では、球たんぱくがどんどん、らせん状に渦を巻きながら、組み合わさって一つの管ができる。

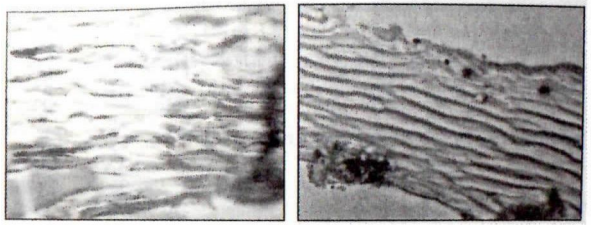
「これが縦に、4本くらいくっつき合って、より太い脈管が形成されます」（写真J）

既成の生物学者、医学者たちは唖然呆然であろう。

〝闇の支配者〟が50年以上前に弾圧した千島・森下学説は、さらに森下博士の研究で、はるかに深化され、ついにチューブリン微小管という人類科学史を、ひっくりかえす大発見に至ったのである。



（図Ⅰ）“氣”エネルギーを吸収、ソマチッドが増殖。



「脈管（血管、リンパ管、ボンパ血管）」と「チューブリン微小管」との関連
体内における正常な脈管（血管、リンパ管、ボンパ血管）の崩壊過程を捉えた写真。これによって、各脈管がチューブリン微小管によって形成されたものであることが明解に判る。

森下自然医学　2016.7.

（写真J）くっつき合って、脈管が形成される

「音叉」振動療法：音の振動で病気を癒し、生命を活性化する

もうひとつ。生命は波動エネルギーである……という驚異的真実を発見した研究者を紹介したい。それが、増川いづみ博士。

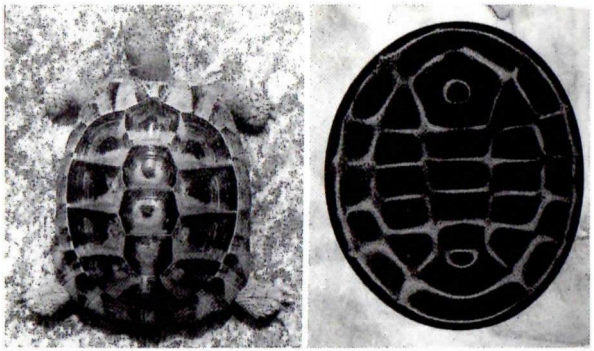
水の本質の研究などで世界的に知られた研究者だ。博士は、さらに音叉療法という新たな音響療法を提案し、実践している。これも、明らかに「波動療法」の一種である。

ここで、博士が用いるのは音波だ。電場、磁場の周波数も、医療効果がある。同様に、音場という音響振動でも、やはり治療効果があるのだ。

増川博士が「波動は生命エネルギーの根幹」と確信を深めた実験がある。

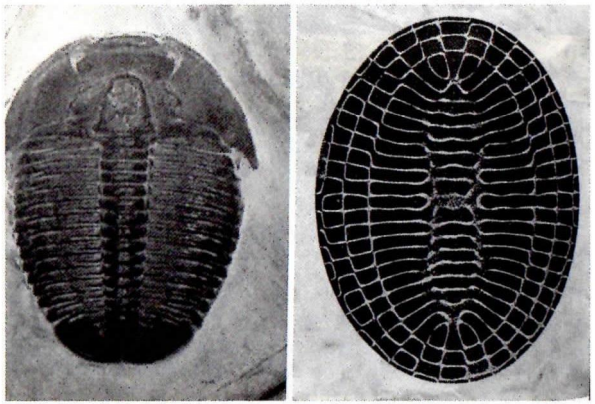
音叉を水面に当てて固有周波数を与えると、水面に現れる波形が周波数によって、まったく異なる図形が現れることを発見した。

それは、驚くべきことに、自然界に存在する生命体（植物、動物）の外形にそっくりなのだ。たとえば（写真K右）は、ある周波数（1088ヘルツ）の音波で水面に現れた模様。同左は亀の甲羅である。両者は、まったく瓜二つ。つまり、音の波動（特定周波数）が、亀の甲羅を形成するのだ。（写真L右）は、ある周波数（9438



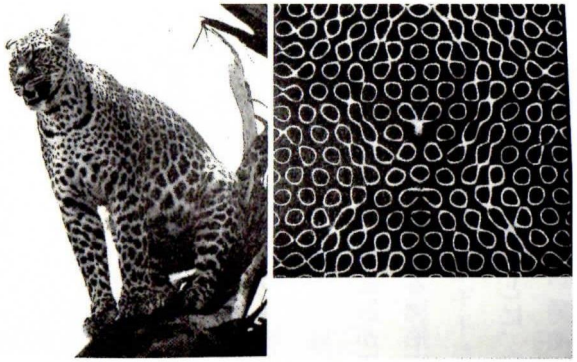
カメ　1088ヘルツ

（写真K）1088ヘルツ音波で水面に現れた模様。



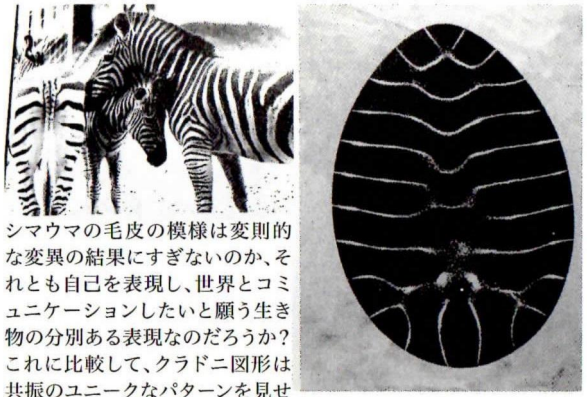
三葉虫　9438ヘルツ

（写真L）9438ヘルツで水面に現れた紋様。



それぞれ個性的な豹の毛皮の模様がどうしてできるのか、今日の生物学でも解明されていない。1万101ヘルツのときのクラドニ図形（右）と比べてみてほしい。

（写真M）1万101ヘルツでまさにヒョウ柄そのもの。

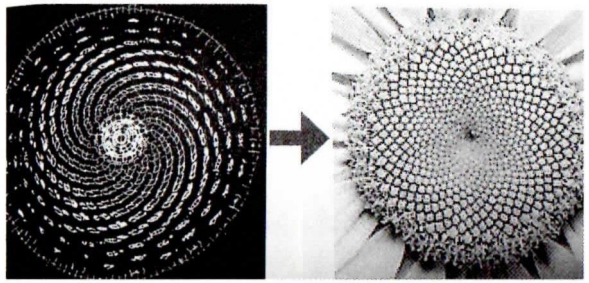


シマウマの毛皮の模様は変則的な変異の結果にすぎないのか、それとも自己を表現し、世界とコミュニケーションしたいと願う生き物の分別ある表現なのだろうか？これに比較して、クラドニ図形は共振のユニークなパターンを見せている。

1355ヘルツ

（写真N）1355ヘルツで出現したシマウマ模様。

音（波＝周波数）がつくりだす万物の形状



102.528Hz　　ヒマワリ

（写真O）ヒマワリ

ヘルツ）で水面に現れた紋様。同左は、三葉虫の化石。その背模様は、まさに9438ヘルツの生体周波数で、形成されたことがわかる。

（写真M右）は、1万101ヘルツで水面に現れた模様。まさにヒョウ柄そのもの。つまり、ヒョウの毛皮の模様は、この周波数で形成されたのだ。（写真N右）は、1355ヘルツで出現した模様。シマウマの模様とそっくりだ。

同様に、周波数ごとに発生する模様は、見事に自然界の生物構造を形づくっていることが解る。（写真O）は、ヒマワリ。（写真P）は、ヒトデ。（写真Q）は、サボテンの外形を、特殊な周波数が形成した事実を証明している。

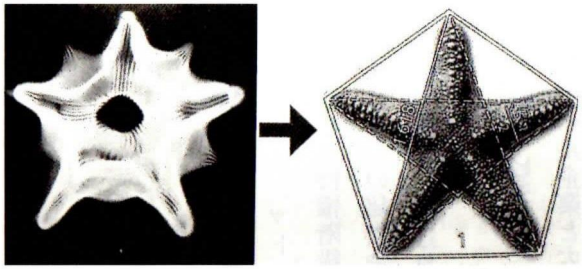
あなたは、ただただ驚嘆するだけだろう。

森下博士のチューブリン微小管の発見も、増川博士の周波数と動植物の外形形成との因果関係の発見も、まさに、正当な評価を得れば、ノーベル賞も吹っ飛ぶ大発見だ。

しかし、世界のテレビや新聞などのメディアは、いまだ完全黙殺している。

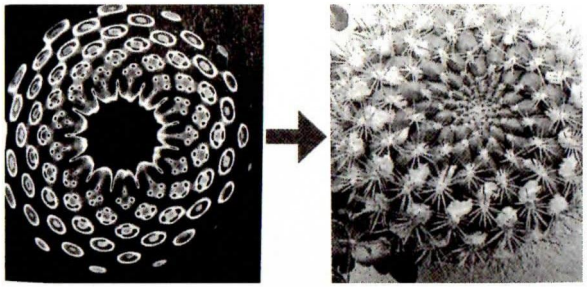
これら、科学史に残る大発見を認めると、それまでのペテン理論も白昼の下に暴露されてしまうからだ。世界の教育（狂育）、学界、メディアを完全掌握している〝かれら〟が、それを許すはずはない。

かくして、テレビ、新聞は、洗脳番組と扇動記事で溢れ、人類の愚民化から家畜化が、深く広く進行しているのである。



ヒトデ

（写真P）ヒトデの外形



52.4Hz　　サボテン

（写真Q）サボテン　　出典：『ウォーター・サウンド・イメージ』

こうして、目覚めた一握りは救われ、目覚めぬ愚者は、家畜への道を転がり落ちていく。